書評

金沢誠著 フランス史

今日ほどわが国のインテリがフランス文化にうつつを抜かしている時はおそらくあるまい。翻訳、旅行記、美術等ジャーナリズムからフランス関係のものを抜き去るならば、その淋しさは考えられたものではない。フランス文化がアメリカ文化やソ連の文化に一辺倒になり得ない人々に、そこはかとない心のより所を与えているからでもあろう。このような訳で屢々フランス文学や美術に傾倒している人々から、この文化を生み出したフランスの歴史を知りたいが、どんな本がよいかと尋ねられるのであるが、さてと原書の方を見渡すと厖大なラヴィスのものを始め、おのおのの時代を夫々専門家によつて書かれた、がつちりとした概説書等新旧硬軟とりまぜて実際数え切れない。しかしフランス史の専攻でもない人々に、これらの原書を並べたてて博識をてらつても智慧のない話である。では日本語でということになると、最近の出版インフレの中からセーニョボーのもの（フランス民主主義発展史）を始め、各時代の歴史書の翻訳が奔流のように出ているのである。ところで翻訳はよほどの名訳でも、フランス語と日本語とは構造も違い、われわれに全然縁のない制度、例えばフランスの旧い官職や旧い行政組織等が出て来て、これらが単に日本語に置きかえられても、果して読者にどれだけの歴史の理解を与えているかは疑いなきを得ない。殊に翻訳が生硬な訳文ででもあれば、むしろ原書の方が手取り早いのである。更に戦後の著しい特色として教科書風の西洋史概説がうんざりする位出版されている。無論これらの概説書から、フランスの歴史だけを切り離して詳細に知り得ない上に、いずれもがとりすまして客観性と穏嫌中正さとを誇つているようであるが、受験勉強でもやらない限りおことわりしたいのである。かくて日本語でしかも手取り早くフランスの歴史を知りたいと注文されると、結局は適当なものがありませんと手を挙げざるを得ないのである。

この時金沢君がフランス史を書き下されたことはまことにその時をえた企であると共に同学の者として御同慶にたえない。この意味で本書の「フランス人の祖先」「封建社会」「百年戦争」「文芸復興」「ルイ王朝の絶対主義」「フランス革命」「市民社会」「第三共和政と現代」等の諸章を期待を持つて読ませて貰つた。これらのどの章を読んでも著者がいかに夫々の時代の最新の研究（特に社会経済史の）に注目され、その成果を摂取されているかがわかるのであつて、この点本書の学問的価値は著しく高いといわねばならない。

しかし本書の真価はこの点に存するのではない。著者がこれらの研究を十分こなし、あくまでも著者のものとして歴史を書いている点こそ重要である。この意味で本書は宮廷の窓から眺められた歴史というような政治史偏重の弊にもおち入らず、社会経済史一点張りの屍体検証だけに終始せず、一切の政治・経済・文化等の諸事象が著者の見識に従つて有機的に配列されているのであり、日本人としての著者の体臭を十分感得することが出来るのである。また聖ルイと孔子やソクラテスと

の比較に見られる著者一流の史観やフランス文学に対する深い造詣が到る所ににじみ出ていて、無味乾燥な史実を補い、最後の頁まで面白く読ませる著者の力倆は高く買われねばならないであろう。また各章のはじめには気のきいたレジュメ（要約）があり夫々の時代を東洋やわが国の歴史と比較して読者に正確なイメージを与えようと努められ、更に巻末にはフランス史学史、参考書、フランス史略年表等が収められていて、いかにも行きとどいた良心を感じるのである。

こうして数え上げると実際良い点ばかりであるが、若し強いて難点を挙げよと云われるならば、それは十九世紀以降の現代史の記事が中世や近世初頭に比べると著しく簡単で、またその叙述も他の箇処に比して精彩を缺くことである。もとより筆者は近代や現代の歴史の方が、古い時代の歴史より重要であるといつた歴史学の地方人根性を持ち合わせているのではない。しかし概説として他の箇所との均衡から考えても、また十九世紀を通じてフランスの世界史に占める位置から考えても現代の方に今少し重心を置かれるべきではなかつたであろうか。とは云え、フランスを近代のギリシアにたとえられる著者にとつては産業革命以後の現代世界でフランス文化は既に使命を果した過去のものであり、この古い文化をいかに新しい世界に適応させようかと苦悩しているフランス国民の姿を詳しく見るに忍びなかつたのかも知れない。

それは兎も角本書は高い学問的水準とフランス的機智と周到な配慮から出来上つている唯一の日本語で書かれた信用の置けるフランス通史として歴史家はもとより広く一般の人々にもおすすめしたい。（創元社一九五四年二月発行。定価四〇〇円）

——豊田　堯——

J. E. Spencer: Land and People in the Philippines. — Geographic Problems in Rural Economy. — (1952)

フィリピン群島を扱つたすぐれた地誌の労作は、個々の断片的な経済地誌を除いては、他地誌に比し、意外に少く、米、独研究者によりわずかに著されたのみである。

米国の研究者 Alden Cutshall, Warren D. Smith, Herbert W. Krieger, S. V. Valkenburg, L. J. Borja, George S. Case 等は群島の資源をとりあげ、一部は農業地帯の区分にまで及んでいるが、その他は主に経済地誌ことに農業関係の報告が多く、農業経済、農業政策方面に寄与せんとする意図を有していた。これに反し、独研究者による労作は W. Tuckermann の Die Philippinen. 1926. の如く、群島全般をとりあつかいながらも個々の要素に分析せず、ただ他地域とは異つた特性のみをとりあげまとめた、小冊子ながらも要を得たものがある。また A. Koll の論文に見られる如く、農業地帯の設置を更に進めて農業地区の設定にまで及んでいる。彼の叙述が図式的に偏りつつも最後に地域区分を目標にしていることは注目すべきである。ただ我々にとつて物足りなく感じられる点は、農業地域における発展段階を歴史的に考察せんとする意図が余り見られぬ点である。ことにスペイン領時代の状態が開却されているので現在の地域といつても極く薄い時の一断面を扱つているに過ぎず、景観の推移を見んとしてもその過